

「止まり木」

大江豊

仕事帰りの乗り換えの駅で
あふれるように聞こえて来た
あれは 雀の群れだ
日が落ちて 影そのものになった
街路樹の家に 数え切れない
雀たちが隠れているのだ 葉っぱが
帽子のように 揺れて 生き物のようだ

白秋先生の雀の宿は もうないのだろうか
街路樹そのものが 夜を引き寄せるように
雀の姿かたちになり代わって さらに
葉っぱを被れなかった 雀たちが
街路樹の上に張り巡らされた 電線に
数珠繋がり肩を寄せ合い 一列に
並んで 揺すりながら 揺れて
鳴き声まで 揺れて 聞こえて来た

この乗り換えの駅まで
乗って来た 快速列車で
吊り革に掴まっていた 通勤通学帰りの
サラリーマン学生たちは 郊外から
さらに 自宅までのルートに
乗り換えるために それぞれのホームや
バス乗り場で 待つように ローターの
止まり木で 寄り添いながら 待つ

雀たちは いつ 帰るのだろうか
次の電車もバスも 帰りは
どうして こんなにも早いのだろうか
きつと 待ち時間は みんなが
集まってくるまでの時間かもしれない
学校や職場がちがっても 集まって来て
待ってられる止まり木があれば
もう 乗り遅れたっていいのだ